

自他両用動詞から自他同形動詞へ

森田 良行

【キーワード】自動詞 他動詞 両用動詞 文型転換 格支配

1 はじめに

一般に動詞は、対応する自動詞ないしは他動詞が備わっている場合、「立つ／立てる」「並ぶ／並べる」のように、語根を共通にする別形態の語形をそれぞれ用意している。「出る／出す」のような発音を異にするペアも例外的にはあるが、漢字表記を共通にするという点で、自他対応の動詞セットとして特に差はない。ところが、一方で「水かさが増す／水かさを増す」「渦が巻く／渦を巻く」など同じ一つの語が自他両用に働く例も見られ、語義もほとんど変わらない。もちろん「風が吹く／笛を吹く」「ボールが弾む／チップを弾む」と、主体や対象に立つ名詞が自他で一致しない例も多く、極端な場合は「敵に負ける／敵を負かす」「値段が負かる／値段を負ける」の例のように、同じ「負ける」形がペアを組む相手次第で自他いずれにも転び、語義内容にも違いを生ずる。本論文は、同じ一つの動詞形態が、自他の観点からこのようにさまざまな様相を呈することに注目し、語彙論・意味論・文法論の各面から分析の手を加え、一般に自他両用動詞と言われる語群を細かく類別して、その特色を探ることを目的とする。(註1)

2 考察の対象とした動词语彙

一つの語形態で自他の用例を持つ和語動詞をピックアップし、それらを以下の分析の対象とした。自他の判定の基準は対象格の「ヲ」を取るという形式的な判断で、「山を越す」が果たして他動詞と言えるかといった突き詰めた問題はここでは目をつぶり、あくまでガ格とヲ格の両例を取る和語動詞の有り様を追究することに主眼を置いた。(註2) 採取した語例は以下の101語である。(漢字表記が複数種あるものは、見出し語を仮名書きとした。)

- あける 自V「夜が～／休暇が～」 他V「窓を～／穴を～／家を～／水を～」
 あがる 自V「値が～／雨が～／学校に～／花火が～」 他V「ご飯を～／お昼
 けに～」
 あげる 自V「潮が～」 他V「棚に～／髪を～／声を～／犯人を～」
 唸る 自V「モーターが～／苦痛で～／聴衆を～らせる」 他V「義太夫を～」
 負う 自V「先人の努力に～」 他V「薪を～／責任を～／重傷を～」
 おくる 自V「1ヵ月を～」 他V「金を～」
 折り返す 自V「終点で～」 他V「ズボンの裾を～／～して3べん歌う」

- おろす 自V「山を～風」 他V「荷を～/品物を～/大根を～」
 被る 自V「フィルムが～」 他V「帽子を～/水を～/罪を～」
 構う 自V「予算に～ず買う/身なりに～ぬ/…ても～ない」 他V「犬を～」
 かわる 自V「担当者が～」 「任地が～」 他V「仕事を～」 「電話を～」
 きく 自V「葉が～/腕が～/無理が～」 他V「口を～」
 組む 自V「皆と～で頑張る/四つに～」 他V「腕を～/活字を～/櫓を～」
 繰り込む 自V「会場に～」 他V「残額を予備費に～」
 繰り出す 自V「皆で花見に～/隊列を組んで戦場へと～」 他V「軍勢を～」
 蹴込む 自V「元金に支出が～」 他V「ボールを～」
 越す 自V「隣に～」 他V「山を～/難関を～/冬を～/先を～/百人を～」
 差し込む 自V「光が～/腹が～」 他V「鍵を～/コンセントに～」
 さす 自V「光が～/魔が～/嫌気が～」 他V「針を～/刀を～/西を～」
 去る 自V「国を～/冬が～/北に～/～五日」 他V「迷いを～/悪友を～」
 仕切る 自V「月末で～/力士が～」 他V「カーテンで～/部屋を～」
 しくじる 自V「試験に～」 他V「試験を～/会社を～」
 洩る 自V「売れ行きが～/筆が～」 他V「回答を～/承諾を～/金を～」
 しゃくる 自V「激しく泣いて何度も～」 他V「水を～」 「あごを～」
 擦り込む 自V「上役に～」 他V「薬を～」
 する 自V「音が～/1000円～/めまいが～」 他V「仕事を～/後輩を課長
 に～/顔を赤く～」
 ずるける 自V「～た気持ち」 他V「宿題を～」
 迫る 自V「敵が～/目標に～」 他V「復縁を～」
 備える 自V「台風に～/敵襲に～」 他V「教室にビデオを～/商才を～」
 背く 自V「法律に～/約束に～」 他V「世を～/夫に～かれる」
 食べる 自V「原稿で～ている」 他V「ご飯を～」
 保つ 自V「3日～」 他V「身を～/安定を～/身代を～」
 頼る 自V「生活を兄に～」 他V「兄を～て上京する」
 垂れる 自V「水が～/電線が～/よだれが～」 他V「釣糸を～/恵みを～」
 つく 自V「手が～/足が～」 他V「手を～」
 培う 自V「書に～」 他V「草木を～」
 突っ掛ける 自V「待ったなしで～」 他V「草履を～」
 突っ込む 自V「敵中に～」 他V「水溜まりに足を～/～んで考える」
 募る 自V「暑さが～/恋しさが～/吹き～」 他V「志願者を～/寄付を～」
 詰める 自V「奥に～/番所に～」 他V「火薬を～/息を～/丈を～」
 つる 自V「足が～/目の～た人」 他V「甘言で人を～/業缶を～」
 連れる 自V「年が経つに～て」 他V「子供を～て出掛ける」
 手伝う 自V「若さが～って無謀な行いをする」 他V「家事を～」

- 閉じる 自V「目が～/水門が～」 他V「本を～/口を～/蓋を～/会を～」
 怒鳴る 自V「大声で～/いくら～ても出て来ない」 他V「子供を～」
 伴う 自V「責任が～」 他V「危険を～/義務を～/子供を～って行く」
 慰む 自V「心が～」 他V「子供を～」 「女を～」
 何する 自V「～ものぞ」 他V「それを～してくれ」
 なまける 自V「～た気持ち」 他V「宿題を～」
 濁る 自V「水が～」 他V「羽田の夕を、夕と～」
 練る 自V「神輿が町を～」 他V「絹糸を～/餡を/構想を～/文章を～」
 残す 自V「土俵ざわで～」 他V「学生を～/飯を～/名を～」
 のす 自V「最近～てきた/銀座まで～」 他V「相手を～/アイロンで～/
 麵棒で～」
 覗く 自V「下着が～ている」 他V「穴から～/古本屋を～/谷底を～」
 のたくる 自V「蛇が～」 他V「下手な字を～」 「キャンパスに絵の具を～」
 運ぶ 自V「話が～/仕事が～」 他V「荷を～/足を～/箸を～/会議を～」
 恥じる 自V「横綱の名に～ない」 他V「不明を～」
 弾む 自V「鞆が～/息が～/心が～」 他V「チップを～」
 馳せる 自V「街道を北に～」 他V「馬を～」
 はだける 自V「胸が～/えりが～」 他V「胸を～/裾を～」
 働く 自V「工場で～/知恵が～/引力が～」 他V「盗みを～/悪事を～」
 憚る 自V「憎まれっ子世に～」 他V「人前を～/人目を～/外聞を～」
 跳ねる 自V「馬が～/泥が～/油が～/芝居が～」 他V「泥を～/上前を～」
 張り込む 自V「刑事が～」 他V「ボーナスを～」
 張り出す 自V「軒が～/枝が～」 他V「軒を～/成績を～/合格者を～」
 張り詰める 自V「気が～/氷が～」 他V「タイルを～」
 張る 自V「根が～/氷が～/腹が～/植が～」 他V「根を～/水を～/相
 場を～」
 控える 自V「後に～/待合室に～」 他V「試合を～/住所を～/食事を～」
 引き上げる 自V「消防車が～」 他V「沈没船を～/運賃を～/課長に～」
 引き付ける 自V「子供が急に～」 他V「磁石が釘を～/彼女は人を～」
 引き取る 自V「お～りください」 他V「身柄を～/息を～/孤児を～」
 引く 自V「潮が～/会社を～」 他V「綱を～/気を～/籤を～」
 開く 自V「花が～/国会が～/実力が～」 他V「蕾を～/本を～/店を～」
 吹き上げる 自V「谷底から風が～」 他V「水を～噴水」
 吹き込む 自V「風が～」 他V「変な考えを～」
 吹き付ける 自V「風が～」 他V「塗料を～/風を～」
 吹きまくる 自V「木枯らしが～」 他V「大ぼらを～」
 ふく 自V「風が～/汗が～」 他V「火を～/粉を～/笛を～/ほらを～」

- 塞ぐ 自V「心が～」 他V「目を～/口を～/穴を～/場を～/責めを～」
 振るう 自V「士気が～/商売が～わない」 他V「腕力を～/勇気を～」
 ふるまう 自V「わがまま勝手に～」 他V「客に夕食を～」
 触れる 自V「目に～/光に～/折に～て」 他V「作品に手を～」
 参る 自V「神社に～/体が～」 他V「みもとに～(手紙を)」
 巻く 自V「渦が～」 他V「渦を～/簾を～/包帯を～/ねじを～」
 負ける 自V「試合に～/敵に～/誘惑に～/漆に～」 他V「値段を～」
 増す 自V「水嵩が～/実力が～」 他V「水嵩を～/人数を～/悲しみを～」
 間違う 自V「考えが～ている/～た理論」 他V「計算を～/意味を～」
 見合う 自V「収入に～た支出」 他V「互いに顔を～」
 見直す 自V「景気が～/相場が～」 他V「答案を～/わが子を～」
 蒸す 自V「今夜は～」 他V「芋を～」
 結ぶ 自V「実が～/露が～」 他V「紐を～/文章を～/手を～/2点を～」
 鞭打つ 自V「驚馬に～」 他V「馬を～」
 持つ 自V「体が～」 他V「荷物を～/恨みを～/クラスを～」
 催す 自V「眠気が～」 他V「眠気を～/送別会を～」
 盛り返す 自V「勢いが～」 他V「勢いを～/劣勢を～」
 休む 自V「10分間～/夜10時に～」 他V「学校を～」
 安んずる 自V「現状に～」 他V「国を～/意を～」
 病む 自V「気に～」 他V「神経痛を～」
 夢見る 自V「夢に～心地」 他V「未来を～/宇宙飛行士を～」
 寄せる 自V「波が～/敵が～て来る」 他V「机を隅に～/身を～/心を～」
 割る 自V「相場が1000円の大台を～/土俵を～」 他V「薪を～/水で～/皿を～」

*101語の選定は筆者が独自に蒐集したものだが、一般の辞書類では必ずしもこれらを、すべて自他の両方を備えているものと扱ってはいない。たとえば『岩波国語辞典』の動詞項目では、「あげる」は〔下一他自〕となっているが、「あげる」はまず「明ける」で〔下一自〕と示し、語義解説の途中で「開ける」を〔下一他〕と別途表示している。また、「おろす」の項では、全体として〔五他〕と表示し、「山を～風」のあとに、▽この意だけ自動詞、と注を付けている。その他、「おくる」の項では、〔五他〕の表示のみで、解説文中の“時を過ごす。「なまけて日を～」”の後に、特に「開ける」のような、五段自といった注は一つ付けられていない。同じことは「負う」の場合にも言え、〔五他〕だけであって、「先人の努力に～所が大だ」の例の後に▽(1)(2)は格助詞「を」、(4)は格助詞「に」を伴う、と助詞の違いとしてのみ注記があって、特に自動詞との積極的表示はなされていない(第5版による)。本論では、諸種の辞書類を参考にしつつも、筆者独自の判断で自他を合わせ持つものと処理した。形式上、自他同形

動詞を出来るだけ多く拾い上げようとの考えがあったからである。なお、次の4語は、以下の理由から、この表より除外した。

終わる…「話を終わる」のように他動詞的にも用られるが、「終える」が正しく、「終わる」はまだ規範的とは認められないので、除外した。

積もる…『岩波国語辞典』では自動詞の例として「ちりも～ば山となる」を、他動詞の例として「安く～っても五百円の品」「人の心を～」を挙げているが、このような他動詞の言い方はあまりしないとの観点から除外した。

泣かす…同辞書では他動詞の「子供を～」のほかに〔俗〕〈自動詞的に〉と注を付けて「君は親切だなあ。本当に～よ」の例を掲げている。しかし、これを自動詞と取ることには問題があるので除外した。

わずらう…「胸を～」と他動詞の他に「思い～」のような自動詞用法もあるが、複合動詞としてしか現れないので除外する。

3 自他両文型の文型転換について

これら101語の動詞は、たとえば「あける」（夜が明ける／窓を開ける／家を空ける）や、「あげる」（潮が上げる／犯人を挙げる）など、用例ごとに漢字の表記を使い分けているものもあるが、語彙史をたどるまでもなく、いずれも同じ和語の用法上の差でしかない。また、表記は同一でも、先に触れた「負ける」のように、「試合に負ける／値段を負ける」と同じ「負ける」だが、意味にかなりの開きが見られる。しかし、同語であることに変わりはない。言うなれば、これら101語は、各語の中に多義語として意味・用法上いくつかの種類があったとしても、全体としては、それぞれ語彙論的に同一語であると考えて差し支えない。差があるとすれば、それは意味・文法の面における違いでしかない。そこで、次に意味論・文法論の見地からこれら101語を細かく検討してみよう。

さて、動詞の自他の関係を、その語が述語として取る文型の観点から眺めると、自動詞文型・他動詞文型の間の互いの文型転換の有り様から、次の6種に分類することができる。(註3)

- ①AガBヲ他V／Bガ自V 私は財布を無くした。／財布が無くなった。
自動車は土埃を立てる。／土埃が立つ。
私は夏休みを過ごす。／夏休みが過ぎる。

*この類は、一般に「電話を掛ける」などを除いて、「私は財布を無くしたが、無くならなかった。」の表現を作ることが出来ない。(註4)

- ②AガBヲ他V／BガA二自V

警官が泥棒を捕まえる。／泥棒が警官に捕まる。

*この類も「警官が泥棒を捕まえたが、捕まらなかった。」の表現を作ることが出来ない。自動詞文型の形の差で、①の一種と見る。

(6)

③AガBヲ他V/A(二)ハBガ自V

私は星を見る。/私には星が見える。

私は鳥の声を聞く。/私には鳥の音が聞こえる。

*この類は「私は星を見たが、(私には)見えなかった。」の表現を作ることが出来る。自動詞文型にA(私)が現れる点、①②と異なる。

④AガBヲ他V/AガB二自V

私は大学を受ける。/私は大学に受かる。

*この類が①～③と異なる点は、自他両文型の主語が「Aガ」で共通していることである。しかも「私は大学を受けたが、受からなかった。」の表現を作ることが出来る。

⑤AガBヲ他V/Aガ自V

月が庭を照らす。/庭が照る。

狐が人を化かす。/狐が化ける。

*この類も自他両文型で主語が「Aガ」で共通している。しかし、「月が庭を照らしたが、月が照らなかった。」の言い方は意味を持たない。

⑥自他両文型の非対応

荷物を積む。/荷物が ×

雪を × /雪が積もる。

*①の文型転換「Bヲ→Bガ」「Bヲ←Bガ」を適用しようとしても、Bに立つ名詞が意味的に述語動詞と結合し得ない。

以上の6類を、先の101語の自他用法に当てはめて、文法的観点からそれらを整理することが次の仕事となる。

4 文法的見地からの検討

第2章の語彙表を見てもすぐわかることであるが、自他両用法を兼ね備えたこれらの語は、そのほとんどが⑥類に属する文型関係で、自他で取るべき主語・目的語(B)が異なる。そのため、自他それぞれが表す動詞の意味は互いに関係が希薄である。なお、先の101語の動詞語彙には②③④類の例は見当らなかった。

①類グループ

「(川が)水かさを増す/(川の)水かさが増す」のように、Bに立つ名詞が等しく、動詞の意義素を共通にする①類は、ほんの僅かである。

繰り出す、垂れる、着く、閉じる、伴う、馳せる、はだける、吹き上げる、増す、間違う

これらの語以外では、Bに立つ名詞の意味によって問題が生ずる。

①⑥の両方にまたがるもの

たとえば「巻く」は、「渦を巻く/渦が巻く」のように①類だが、「包帯を巻

く」の自動詞形「包帯が巻く」の言い方はない。自然現象のみ①類で、意志的行為では自動詞形を欠く⑥類となる。また、「運ぶ」の場合、意志的行為でも「話を運ぶ／話が運ぶ」とコト名詞では①類だが、「荷物を運ぶ」「足を運ぶ」のモノ名詞では、やはり自動詞形を欠く⑥類となる。そのほか、「眠気を催す／眠気が催す」に対する「送別会を催す／送別会が催される」のような自動詞形の代わりに受け身形で表す例も見られる。「催す」の意味“生起”対“開催”、非意志対意志的といった意味論上の相違も、同時に問題となるグループである。

運ぶ、跳ねる、張り出す、張る、開く、巻く、結ぶ、催す、盛り返す

文型が①⑥を左右する例

「触れる」は「(作品に)手を触れる／(作品に)手が触れる」で①類だが、「(作品が)目に触れる」では他動詞形がない。しかも、自動詞形も、「目に触れる」全体が一語化してガ格を取っている。いわば「～ガ目に触れる」文型としてまとまって機能していると言ってもいい。ここで「触れる」について少し詳しく見てみよう。「触れる」を文型面から分類すると次の4種になる。

ア、モノがモノに触れる(自動詞、非意志、受動的／能動的)

「柔らかな物が足に触れた」「電線が底に触れて危険だ」「机の角が壁に触れている」「塗り立てのベンキにズボンの裾が触れて汚れた」「ほら袖口がスプーに触れているよ」「何か固いものがスコップの先に触れたようだ」「看板の字が目に触れる」「習作が先輩の目に触れたのが出世の始まり」「いやな噂が時折耳に触れる」「光に触れると感光して使いものになりません」「湿度に触れる」「海外の新風に触れる」「外国に旅して新しい空気に触れるのもいい」

イ、モノでモノ・コトに触れる(自動詞、意志的、能動的)

「ピンセットで患部に触れる」「棒で蛇の尻尾に触れる」「指先で刀の刃に触れる」「著書で先人の学問に触れる」「翻訳で外国作家の思想に触れる」

ウ、モノにモノに触れる(他動詞、意志的、能動的)

「料理に箸に触れる」「作品に手を触れないでください」

エ、モノを手に触れる(「触れる」は自動詞。「手に触れる」全体で他動詞的。意志的、能動的)

「この私の野心的な作品を手に触れてみようとしなさい」「せっかくのプレゼントの包みを手に触れることもなく引き上げてしまった」

問題はエで、「手に触れる」の範囲では自動詞だが、句全体とし見れば他動詞である。(なお、このエの文型は、小泉保氏ら編『基本語動詞用法辞典』では取り上げられていない。)句もしくは文型といった巨視的な視野で文法をとらえる

ということ、つまり意味論的視野で文法論を眺め直すと、たとえば慣用句なども慣用だからといって特別視することなく、語と同じレベルで分析することが出来る。そのような視点に立って自他の有り様を眺めると、これまで問題とされなかった事象が見えてくる。たとえば「売る」は他動詞だが、「他人に恩を売る」を句「恩を売る」単位に広げると、自動詞用法へと変じていく。反対に「着る」は他動詞で「着物を着る」などと用いるが、句「恩に着る」では自動詞的となり、全体として「～ヲ恩に着る」で他動詞として働く。動詞の自他の問題は、個々の単語単位だけで眺めることは、時に片手落ちとなることを了解しておく必要がある。(この問題は、後に述べる⑤類の変化形「頼る」で再度触れる。)なお、本論では、いちおう語彙レベルで論ずるにとどまったことをお断わりしておく。

⑥類グループ

この⑥類は、Bに立つ名詞が自他のどちらか一方にだけしか立たないグループである。その理由として次の場合が挙げられる。

ア、自他の一方が、述語動詞を含めた句全体として、比喩や成句・固定した言い回しなどとなり、結果として自他の両形式を阻んでいるため。

イ、述語動詞の意味が転義や比喩的意味・敬語動詞など、自他で差異が見られるため。

ウ、動詞の自他による意義素そのものには大きな差はないが、慣用として語結合の取り合せが、自他でそれぞれ固定しているため

まず、アに当たる語はきわめて少ない。

食べる「原稿で～ている」、手伝う「若さが～って無謀な行いをする」、連れる「年が経つに～」、何する「～ものぞ」、夢見る「夢に～心地」と、いずれも他動詞であるものが、比喩や擬人法・成句などにより、臨時に自動詞用法を生み出している場合である。

次に、イの転義・比喩的意味などによるグループでは、述語動詞が、結合する相手の名詞の意味によって、さまざまな派生的意味を呈し、結果として多義語となる例である。代表的な語で見てみよう。

する「音が～」 「仕事を～」

働く「工場で～」 「盗みを～」

持つ「体が～」 「荷物を～」

弾む「鞆が～」 「チップを～」

上がる「値が～」 「ご飯を～」

「する」の自然現象と人間行為、非意志と意志的。他動詞となる後者は「行なう」に通じ、自動詞となる前者は意味の抽象化とも取れる。同じことは「働く」についても言える。ただ、「工場で～」の自動詞のほうが具体的行為を意味し、他動詞の例が抽象化されている。「持つ」はもともと“保つ”の意味で、原義として自動詞用法を、他動詞では荷物や車・財産などの語を目的語として受けて、

携帯・所持などの派生義となる。多義語化である。「弾む」になると、かなり意味に開きが生じ、現代語感覚では、自他両者の意味に直接の繋がりを感じさせない。「上がる」では、「ご飯を～」のように上方向移動の意味が上位者行為へと転化され、敬語表現になることにより、他動詞用法を生む。このようにイグループになるものは、動詞の意味変化・多義語化と深く関わっており、文法論よりは意味論的見地からの検討がまず要求されるグループである。以下に所属語彙を掲げておく。

上がる、開ける（明、空）、上げる（挙）、喰る、送る、効く（利）、練り込む、蹴込む、越す（超）、差す（指、刺、挿）、しゃくる、する、突っ掛ける、募る、吊る、慰む、濁る、練る、のす、のたくる、弾む、働くはばかる、張り込む、張り詰める、引き上げる、引き付ける、吹き込む、吹きまくる、ふるまう、参る、持つ、割る

ウのグループは、述語動詞の意味に自他で大差はないと判断される場合で、意義素のかかなりの部分を共通にすると思われる例である。もちろん結合すべき相手の語彙を異にしているわけであるから、厳密には多少の意味差のあることは当然である。代表的な例で見よう。

組む「皆と～んで頑張る」「腕を～」

涉る「筆が～」「回答を～」

残す「土俵ぎわで～」「飯を～」

吹く「風が～」「笛を～」

「組む」は自他どちらにしても“複数のもの同士が交わり合って一つになる”ことだし、「去る」は“そこから離れて遠ざかる”、「涉る」は“ことの進行の順調に抄らぬ”意。これらに対し「吹く」は意味にやや開きが見られるが、“空気が動き流れる”ことを基本としての現象で、以上4語のいずれを取っても、その主体自体の動きが自動詞。他のものへと差し向ける行為を他動詞が表していると言えよう。その点から言っても、このグループの動詞は、意味論的問題よりも文法論的視野から分析すべき問題の動詞群と言えそうである。所属語彙を以下に挙げる。

折り返す、下ろす（降、卸）、組む、差し込む、去る、仕切る、涉る、ずるける、迫る、保つ、培う、突っ込む、詰める、なまける、残す、覗く、引き取る、引く、吹き付ける、吹く、塞ぐ、振るう、蒸す

⑥類で二格を取るグループ

対象格の「～ヲ他動詞」文型に対して、対格や場所格の二を取るため自動詞として働き「～ニ自動詞」文型として自他両様に働くグループがある。

負う「責任を～」「先人の努力に～」

備える「教室にビデオを～」「台風に～」

負ける「値段を～」「相手に～」

述語動詞の意味は、自他でほぼ同じなもの（「負う」）、基本は同じだが多少の差を生ずるもの（「備える」）、かなりの差のあるもの（「負ける」）と、さまざまだが、文法論的に自他の非対応である点はこれまでの⑥類と変わらない。ヲ格をガ格に変えて「値段を負ける／値段が負かる」「相手を負かす／相手が負ける」とするなら①類だが、こちらは、むしろ主体を自他でそろえて「私は～ヲ負ける／私は～ニ負ける」と対応させるところは、次に触れる⑤類と共通している。ただし、ヲ格・ニ格に立ち得る名詞は自他文型で一致しない。その点が⑥類とは異なる。

（私は）責任を負う／（私は）先人の努力に負う。

（私は）教室にビデオを備える／（私は）台風に備える。

このグループに属する語彙には次のものがある。語数は多くない。

負う、擦り込む、備える、背く、恥じる、控える、負ける、見合う、休む、安んずる、病む、寄せる

ところで、「被る^{かぶ}」は、「彼は罪を被る」「帽子を被る」と他動詞に働くが、一方で「フィルムが被る」（露出度が不適當でぼやける）と自動詞用法を持つ。ヲ格・ガ格で立つ名詞が異なるから、⑥類ということになるが、「フィルムが水を被る」のように主体をそろえると、「被る」の意味は異なるが、次の⑤類に一歩近づく。

⑤類グループ

怒鳴る「父が子供を～」 「父が何やら大声で～ている」、 「（部長が）何人も部下を～」 「（部長が）いくら～ても誰も出て来ない」

他動詞用法は「叱り付ける」の意味。自動詞用法は“わめきたてる” “大声で叫ぶ”であるから意味に多少の差があるが、それは相手の有無による違いで、基本的意味は同じと見てよい。「父が～」 「部長が～」と自他で主語を共通にする点から⑤類だと言える。ただし、厳密な意味での⑤類は「怒鳴る」のみで、たとえば

怒る「父が子供を～」 「父はひとりで～ている」

など「おこる」の他動詞用法は、まだ規範的な言い方とは言い難いのではないか。この場合は「叱る」が正しい。

⑤類の変化形

次に、⑥類「AガBヲ他動詞/Aガ自動詞」の文型転換を取らないで、「AガBヲ他動詞/AガBニ自動詞」という特殊な文型対応をするグループについて触れる。他動詞の目的語「B」が、文型転換の中でも「Bニ」として生き残り、二格を取るところから自動詞と判定される特別の動詞群である。例を見よう。

鞭打つ「驚馬を～」 「驚馬に～」

構う「犬を～」 「犬に～」

しくじる「試験を～」 「試験に～」

頼る「兄を～」 「兄に～」

これらは見様によっては格助詞「ニ/ヲ」のゆれ現象とも取れる。最後の「頼る」は、「弟は兄を頼って上京する。」 「弟は学費を兄に頼る。」で、確かに後者の例は「兄に頼る」と、直接には二格を取る自動詞であるが、文型レベルで見れば「学費を兄に頼る」のように「兄に頼る」全体がヲ格を取って他動詞的に働いていると言える。ここにも、単語レベルを超えた、句のレベルでの文法的視野が求められるのである。

5 語彙論・意味論・文法論からの整理

まず、3章と4章で述べたことの、まとめの表を掲げておく。

類別	語例	文型上の対応関係	他	他	×	語彙面	意味面	文法面	ヲ/カ ヲ/ニ 動格類
			/ 自	/ ×	/ 自				
①類	増す	水嵩を～ / 水嵩が～	+			+	+	+	+
①⑥類	巻く	渦を～ / 渦が～ 包帯を～ / ×	+	+		+	+	±	±
⑥類ア	食べる	飯を～ / × × / 原稿で～		+	+	+	-	-	-
	イ 弾む	チップを～ / × × / 鞠が～		+	+	+	-	-	-
	ウ 洗る	回答を～ / × × / 筆が～		+	+	+	±	-	-
二格型	負う	責任を～ / × × / 努力に～		+	+	+	+	-	-
⑤類	怒鳴る	子供を～ / × × / 一人で～		+	+	+	+	-	-
	変化形 頼る	兄を～ / × × / 兄に～		+	+	+	+	-	±

2章で101語の自他を兼ねる動詞語彙を一渡り眺めてきたが、れらは語彙論的にはいずれも同じ一つの語でありながら、文法論的には自他の用法面で性格を異

にする場合が多く、それが意味論的観点からさまざまな影響を文法面に与えていることも、つかめてきた。そこで、4章の分類順に従って、語彙・意味・文法の相互関係をまとめてみたのが、前ページの表である。

煩雑ではあるが、理解しやすいよう代表語例と自他両文型の例文とを掲げ、ヲ格/ガ格、あるいはヲ格/ニ格に同一語彙が立ち得る場合は、それとわかるよう同一語の例で示した。×は自他の言い換えの不可能なことを、+-±は語彙・意味の面で、それぞれ+は自他が同一、-は異なることを、±は両方の例のあることを示す。文法面の欄では、同一語彙による文型転換の可否を+-±で示した。すなわち、+は転換可能、-は不可能、±は両例のあることを表す。最後に掲げた「ヲ/ガ、ヲ/ニ共通語彙」とは、ヲ格とガ格・ニ格とで立ち得る名詞語彙が同じか異なるかを+-±で示したものである。

6 結論

さて、自他両用とは、同じ語形が意味面で自他間に共通性を持ち、文法面でも格に立つ名詞語彙に異同がない場合を指すのが厳密な意味での概念規定であろう。その意味では、先の表から見て、まず、①類は問題ないし、①⑥類も両用の範疇に含めてよかろう。あとは、⑤類の変化形（「頼る」など）も、文法面でガ格とニ格間での名詞の共通性から、両用の範囲に入るのではないか。その他はすべて（-）印が付いていることからわかるように、両用動詞と呼ぶには問題がある。両用とは、あくまでその語が同じ意義素の範囲の中で自他の両方を兼ねるという意味である。その点からすると、⑥類は両用のレッテルを貼るわけにはいかない。意味論的に見て、異なる語義（多義語間の別々の意味枝）においての自他の分業であるから、これは自他が同じ語形を取って別々に機能している“多義語の文法的寄り合い所帯”とでも言うべき性格の語彙である。このような一群を“自他同形動詞”と名付けようと思う。一つの語が自動詞・他動詞の両方に働くと語動詞には、両用動詞から同形動詞まであり、その点、歴史的に自他のゆれ現象から起こった漢語の両用動詞とは、性格が異なると言ってよかろう。(註5)

注

- 1、拙稿「自他同形動詞の諸問題」（『国文学研究』102号 1989年10月）参照。拙著『動詞の意味論的文法研究』（1994年 4月、明治書院）所収。
- 2、国広哲弥「自動詞と他動詞」（『月刊言語』18-9 特集「動詞学」のすすめ 1889年9月）では「越す」を他動詞とすることに疑問を投げ掛けている。
- 3、拙稿「自動詞と他動詞」（『国文法講座 6』1987年7月、明治書院）参照。
- 4、拙稿「電話を掛けようとしたが掛からなかった」（『日本語学』3-1 1984年 1月）参照。拙著『誤用文の分析と研究』（1985年 9月、明治書院）所収。
- 5、拙稿「新漢語成立に伴う動詞性の問題」（『辻村敏樹教授古稀記念論文集・日本語史の諸問題』1992年 3月 明治書院 所収）参照。